

高木兼寛の女子教育論

何年前か前、東京慈恵会医科大学看護学科の平尾真智子准教授から高木兼寛先生の女子教育に関する数多くの講演筆記録をいただいた。当時の女性雑誌に掲載された筆記録を同女史が精力的に集められたのである（文献1-32がそれである）。高木先生が女子教育について抱いていた全思想の宝庫である。これから各方面から論評されることであろう。本小論はそれを筆者なりにまとめ、論評したものである。

I. 明治維新と女子教育

高木兼寛(1849-1920)が医学を学ぶため英国に留学したのは、明治維新(革命)後まだ日が浅い1875(明治8)年であった。明治維新によって、日本は数百年にわたる長い封建制を倒し、西洋流の近代的民主主義と男女平等を実現する第一歩を踏み出したわけであるが、しかし高木が英国に出立した明治8年ではまだ日が浅く、多くの封建制の遺物を残していた。そのため彼が英国で実際に見聞したのは、ことごとく日本の現状とは大きく異なり、彼はその違いに驚くばかりであった。

その驚きの一つは、女性の社会進出の目覚しいことであった。とくに医学校、病院における女性医師、看護婦の活躍は目を見張るものがあった。日本では、女医はおろかまだ正規の看護婦さえ一人もいなかったのである。彼は留学を終え、日本に帰国したときには、さっそく女医と看護婦の教育に携わらねばならないと心に決めた。

英国で強く感じたことのもう一つは、日本人の体格が貧弱で、醜いことであった。英国人のギリシア彫刻のような立派な体格をみて、彼は日本人としてコンプレックスを抱くばかりであった。彼は日本人のことをこのように卑下している。「日本人は、脚は短く、かつ曲がっているから、まるで浅草の狸々

が立っているようなものである」と(狸々とはオランウータンのことである)。

このような日本人の体格、体形の醜さも、けっきょくは幼少時からの食事、生活様式の違いからきているわけであるから、これらを改善せねばならない、これも帰国後の宿題であると心に決めた。しかもこの重要な改善に携わるのは主に主婦であるから、帰国後まずやるべきことは婦人にたいする生活改善の教育であると思った(実際に彼の講演の大部分はこの生活改善にかんするものであった)。

英国で感じたことの三つ目は、英国人の行動のすべてがキリスト教にたいする強い信仰からきていることであった。高木はこのように述べている。「英国に参って一番に感じましたことは、この国の出来事すべて、英国人の行為のすべてがキリスト教思想を土台にしていることでありました。これを見て私は、なるほど日本人もこれでなければならぬという気持ちが強く起きてきました」と。彼が帰国後行った女子教育をはじめ多くの社会事業がかなり宗教的色合いを帯びるのはそのためであると思われる。

さて高木の女子教育の実際について論をすすめたいのであるが、その前にここで一応簡単にそのころの日本の女子教育の一般状況について概観しておきたい。

日本は、明治維新(革命)の最大の政治変革、廃藩置県によって、封建制から民主制への第一歩を踏み出したわけである。この変革によって、それまで支配してきた武士階級は解体され、華族、士族としてまとめられ、支配されてきた庶民は平民(農工商)としてまとめられ、その上下の階級差は著しく縮小された。そして1872(明治5)年には、義務教育制度が發布され、ここにはじめて国民全体が男女平等の初等教育を受けられることになったのである。法令の文言には、教育を受ける対象として「華士族農工商および婦女子」と書かれてあり、とくに「婦女子」を強調しているところは注目すべきであろう。女子には教育はいらぬといったそれまでの考えが頑強に残ることを危惧したためと思われる。

この法令によって貧乏な庶民の女子も小学校にいけるようになったわけであるが、実際はこの危惧どおり、その就学率は意外に低いものであった。義

務教育制度発布5年後の1877（明治10）年でもその就学率は男子53.5%、女子22.5%に過ぎず、20年後の1897（明治30）年になっても男子80.6%、女子50.8%と、女子の就学は約半数に過ぎなかった。やはり女には学問は要らぬ、女には学校よりも裁縫所、余裕があれば遊芸を、食わぬがためには子守奉公が相応しいといった思想が支配していたからであった。

政府は、この義務教育法令発布と同じ年に女子の中等教育として東京女学校（後の竹橋女学校）を設立した（しかし残念ながら不人気のため8年後に廃校になった）。さらに政府は1875（明治8）年に東京女子師範学校を開校した。そして廃校になった東京女学校の生徒をここに収容した。女子師範学校設立の趣旨は、（米人ダビット・マレーの建策によって）「女性は児童を教育する最良の教師であるから、その女性を通じて教育を発展させよう」というものであった。

しかしここでも趣旨通りにはなかなか進まなかった。100名の募集に応募したのは80名ばかりで、しかも卒業時にはわずか15名になってしまったという不人気ぶりであった。それでも政府は、地方にも女子師範をつくり、この東京女子師範学校は女子高等師範学校に昇格させた（現在のお茶の水女子大である）。

このような女子の中等、高等教育の低調さは、上のような父兄の封建思想にあったことはいまでもないが、女子本人の教育を受けたいという意欲が弱かったことも原因であった。もともと日本には、奈良朝時代から女性の美德として「三従」の思想というものがあつた。この「三従」というのは、女は「家にあつては父に従い、嫁しては夫に従い、夫死しては子に従え」というもので、これをかたく守る女性こそが賢女であるとされてきたのである。

しかしこのような男性中心の思想が世を支配している限り、女性に主体性が生まれるはずはなかつたのである。福沢諭吉も「学問のすすめ」（1873）で、この三従の思想を激しく批判している。「人間にはみな自由の権利があり、家庭にあつても身分的不平等があつては断じてならない」というのである。彼はさらに続けて、封建的な父と夫の専制をやめ、一夫多妻をやめ、一夫一婦のなごやかな市民的家庭をつくれというのであつた。また和やかといって

も、しゅうと・しゅうとめと息子夫婦はなるべく同居せず別居が好ましいとした。しゅうと・しゅうとめも「実の親子」と同じだといってみても、それは人情の自然ではないというのであった。

このようにして明治初期にはじまった女子教育も容易には進展しなかった。高木兼寛も、日露戦争勝利の翌年、1906（明治39）年になっても、まだこのような講演をしている。「日本で欧米に勝るところは陸海軍の知識ぐらいで、その他には何一つとして誇るにたるものはない。いわんや婦人の知識・教養の如きはもっとも低くて、外国人との交際の途が開けても、外国人とともに遊ぶ仕方さえ知らぬために、手を携えて相楽しむということも出来ない、音楽も知らねば舞踏もできない、話も出来ねば歩くことさえ充分に出来ない、それで以って強國の仲間入りをしたと云うてみたところで、少しも威張ることは出来ない。故に我輩は女子の教育も男子と同等に高等教育を授けて、世界的知識・教養の啓発に努めることが必要であると考える」（「欧米婦人と日本婦人」と）。

キリスト教宣教師による女学校設立 このようにして一応女子教育の道は開かれ、「人間の道に男女の差あるなし」と説かれてみても、現実には古い封建思想が牢固として作用し、女子の中等・高等教育はなかなか進展しなかった。

そんな中であって近代的女子教育を熱心に進めたのは、むしろ米人・キリスト教宣教師らであった。彼らのつくった学校は、宗教教育というある種の弱さをもっていたが、封建思想に反対するという革新性があった。このようにしてつくられた女学校にフェリス和英女学校、横浜共立女学校、神戸女学院、同志社女学校、立教女学校などがあった。

またキリスト教徒・巖本善治は、婦人雑誌「女学雑誌」を刊行し（1885）、その中で真の男女同権のためには、女子に経済的独立が必要であり、そのためには女子に相応しい職業教育をする必要があると説いた。

II. 社会進出のための女子教育 —— 高木兼寛による女医、看護婦の養成 ——

高木兼寛は5年の英国留学を終えて1880（明治13）年暮れに帰国した。そして帰国早々、彼は医学校（成医会講習所）、慈善病院（有志共立東京病院）を次々と設立していった。英国では多くの女性医師が生き生きと活躍しているのを目にしたし、また正規の教育を受けた看護婦が医師と一緒に車の両輪のごとく協力しているのを見た。これを日本でもぜひ現実のものにしないといけないと考えた。

高木が帰国した年、日本の教育に関する法令も改正され、小学校教育は初等3年、中等3年、高等2年の計8年制になり、女子の中等教育・女学校（4年）は小学校・初等、中等を終えて（つまり6年を終えて）入学することになった。

1. 女医の養成

明治前期は、まだ日本では女子にたいする医学就業の門はかたく閉ざされていた。しかし高木が帰国したころになると、日本でもわずかではあるが、どうしても医師になりたいという女性が現れてきた。男子にたいする医学校は、東大医学部、済生学舎、好寿院、東亜医学校などいくつかあり、資格試験である医術開業試験も1875（明治8）年から実施されていたが、しかしそれら医学校も、彼女たち女子にたいしてはまったく門戸を開いていなかった。そのような志をもった女性は、いちおう医学とは直接関係ないところに身をおき、何とか医学校に入学する機会を待つしかなかったのである。日本ではじめて女医になることができた荻野吟子（後の女医第一号、1851-1913）や生沢クノ（第二号、1864-1945）、高橋瑞子（第三号、1952-1921）らはみなそのような待機の生活を強いられたのであった。荻野吟子のばあいは、まず東京女子師範学校に入学して（1875）その機会を待っていたし、生沢クノの場合は東京府病院の産婦人科の見習いとなって（1880）待っていたし、高橋

瑞子は産婆院に入門して（1880）、産婆をしながら待っていた。

荻野吟子は1879（明治12）年に抜群の成績で東京女子師範学校を卒業したが、彼女はまず同校の永井久一郎教授に、医学を修めるため、どこか医学校を紹介してほしいと懇願した。永井は彼女の並々ならぬ決意を知ったので、医学界の有力者で陸軍軍医監であった石黒忠恵子爵に紹介した。石黒は医学校を二、三訊いてくれたが、当然ながら、みな断ってきた。しかし幸いなことに、そのなかに石黒と懇意にしていた下谷練堀町の医学校・好寿院があり、そこに例外的に入学することができた（1879）。しかし入学はしたものの、教育をうけることはまた大変であった。「男尊女卑、女性蔑視」にこり固まった男子学生があまりにも多く、荻野は彼らにいじめぬかれた。教室への出入りの度に冷かされ、黒板での擲揄、落書きなど見るに耐えないものであった。彼らは女性を性の対象にしかみていなかったのである。

その点では、生沢クノの場合も同じであった。彼女も入学を許してくれる医学校を探しあるき、苦勞のすえ遂に神田駿河台の東亜医学校に入学が許された（1882）。しかしここでも男子学生のいじめはひどいもので、彼女は断髪・男装をして通学し、授業も独りだけ隣室の机で聴講したといわれる（そのため「別室先生」の異名を奉られたという）。

産婆の高橋瑞子が門をたたいたのは本郷の済生学舎であった。彼女は長谷川泰校長に面会するために、三日三晩門前に立ち尽くし、入学させてくれることを懇願した。そして根負けした校長をして「女子の入学が許されぬというのは、確かに不都合であるように思う。しかし自分の一存では決められぬ。教師とも相談のうえ、返事をしよう」と言わせるまでに成功した。こうして1884（明治17）年、高橋の捨て身の努力によって、済生学舎は正式に女子の入学を認めることにしたのであった。

高木兼寛が英国から帰国し、医学校・成医会講習所をつくったのは、このような女医希望者が苦勞しているさなかであった（1881）。彼は英国での経験から、日本でも男女同じ方法で入学させ、同じ方法で教育するのが当然であると考えていた。しかし日本の現状は上に見たとおりである。彼はこの時点での女子の入学は保留し、翌年まで延期することにした。そして医学を学

ぶための女子の基礎学力，つまり中等高等教育の現状を調べ，また男子医学生の教養，品性の現状を考慮したうえで，ひとまず男女共学による医学教育が可能かどうかを試してみることにした。

高木は，1882（明治15年），当時女子教育の最高機関といわれた東京女学校（先述）から，成績技群の二人の才媛・松浦里子（1861-1891）と本多銚子（後の女医第三号，1864-1922）を選び，成医会講習所に入学させた（医学校が正式に女子を選抜入学させた最初の試みであった）。

彼女たち二人は，男子学生から女性蔑視的な行為でいびられることはなかった。それは高木のかたい信念と，当時の教師がすべて海軍軍医であったことによるとと思われる。諸般の事情でこの医学校は当時まだ海軍軍医学校と共生生活をしていたのである。当時の軍医学校の生徒の一人はこのように回顧している。「軍医学校に入学してしばらくして，女性を交えた，服装のまちまちな成医会講習所の生徒が背後で聴講するようになった」と。ここにてくる女性というのは，おそらく松浦，本多の二人であったと思われる。

とにかくこのようにして，当時の医学校のいくつかはひとまず女性の入学を許したわけであるが，といって卒業しても医師になれるわけではなかった。彼女たちには，医師になるための医術開業試験の受験資格がなかったのである（彼女たちは卒業すれば当然男子と同様受験資格が与えられるものと思っていたらしいが）。

荻野は好寿院を卒業して（1882），さっそく医術開業試験の願書を内務省に提出した。しかし意外にも前例がないからということであっさり却下された（予想していないことであった）。彼女の落胆振りは大変なもので，当時をこのように綴っている。「小家を出でてかぞふれば，早くもここに十有余年，流浪変転人世の苦辛すでに味ひ尽せるの暁，世はいまだ予を容れず，……進退これ谷まり百術すべて尽きぬ，……」と。

荻野はしかし志をひるがえすことはなく，ある人の紹介状をもって内務省衛生局長・長与専齋に直接面会し，受験許可を請願した。また同じ1883年ころ東亜医学校の生沢クノも，済生学舎の高橋瑞子も，さらに成医会講習所の本多銚子も東京府や内務省に受験許可の請願書を次々と提出した。

このような激しい請願運動によって、ようやく政府も、1884（明治17）年の医術開業試験から、女性にも受験資格を与えたのであった。

こうして1885（明治18）年から数年のうちに荻野吟子、生沢クノ、高橋瑞子、本多銚子が次々と合格していった（成医会講習所の本多も女医第四号の榮譽を担ったのである）。ただ同じ成医会講習所の松浦里子は前期試験には合格したが、それから結核が再発し後期試験は諦めざるをえなかった（医術開業試験は前期、後期の二期に分かれていた。その後の松浦里子については後述）。

しかし高木はこの本多、松浦の後に、女子の入学をゆるすことはなかった。男女共学による女医養成が今後あまり成功するとは思わなかったのではないだろうか。本多の手記にもこんなところがある。「そのころの女医学生は、男の学生に圧迫されて、解剖の標本なども充分に見ることができないため、夜ひそかにちょうちんをつけて高輪の泉岳寺墓地に行き、あそこで頭蓋骨を一つ、こちらで大腿骨を一つと、ひろい集めて持ち帰り、勉強しました」と。

当時の最大の医学校・済生学舎ではまだ女子の教育を続けていたが、この男女問題は更に大きくなり、社会問題、刑事問題にまで発展していった（不良男子学生による暴力事件が続発したのである）。そのためこの医学校では遂に1900（明治32）年、女子の入学を中止し、さらに在学中の女子学生まで退学させた。これを見かねた吉岡弥生が自宅に「東京女医学校」を開き、彼女たちを救った話はよく知られている（後の東京女子医科大学である）。

まだ日本では男女共学をすすめるための教養、品性といったものが学生にととのっていなかったのではないだろうか。これは幼少時からの家庭教育をふくめた人間教育の問題であった。高木は1906（明治39）年の講演のなかでこのように述べている。「欧米の婦人は子供をよく愛するけれども、常にむち打つことを忘れておらぬ。少しでも軌道をはずれた行いがあれば、厳格に矯正せしめて、少しも容赦しない。故に子供は上長に対してはなほだ服従的精神に富んでいる。したがって独立的生活をいとなむ上においても非常に効果を奏するが、日本では父母の心に一定の軌道がないため善悪に対する標準がたたない。かつ子供を保護することに過ぎて、自分の病気の容態さえ医

師に向かって表白することさえ出来ない子供が多い。欧米では、男女共学をさしても少しの過失（あやまち）がないが、これは一定の軌道を踏んでいるからである」（「欧米婦人と日本婦人」と）。そしてこの軌道を示すのが教育であり、その軌道の土台になるのが宗教であると言うのである。

高木の女医養成を、医療現場での女医の育成にまで拡大すれば、有志共立東京病院（当時は東京慈恵医院に改称）の婦人科主任・岡見京子（1859-1941）についても述べるべきであろう。岡見は、横浜共立女学校、東京女学校をでて（1880）、一度はキリスト教の貧民伝道に精を出したものの、これには医療活動が不可欠であることを実感して、女医になることを決した。しかし前述のように日本では女医になる道がなかったため、外国に行ってそこで女医になることを画した。そして米国ペンシルベニア女子医科大学に留学し、そこで女医になったのである（1889）。当時の日本では「欧米の大学の医学卒業証書を得る者は無条件で医師に」なれたのである。

彼女は帰国後、1889（明治22）年8月、すぐに医籍登録、開業免許を得ることができた。しかも幸運なことに、その翌9月にはもう高木兼寛によって抜擢され、東京慈恵医院の婦人科主任を委嘱されたのであった。大病院で女医を責任ある地位につけた最初の事例であった。

吉岡弥生もそのことをこのように賞賛している。「この慈恵病院の高木兼寛先生は、先に成医会講習所で女医養成をされたことでもわかるように、女医に対して大変深い理解をもった方でしたから、アメリカ仕込みの岡見さんを抜擢されたのも、果たして女医が日本でどれだけのことがやれるかという最初の実験であったように思われます。高木先生の弟子に当たる本多銈子さんもこの時、岡見さんの助手として働いていたのでした」と。

高木がこの岡見医師にあたえた励ましの短い言葉がのこっている。「貴女がこの職分につくことは婦人の開明上に大変重要であり、またこの職分を遂行することはキリスト教伝道のもつ意義にもよく一致する」と。高木が彼女に与えた数少ない言葉として貴重である。

高木院長の指導をうけながら慈恵病院の婦人科の診療をしていた頃の岡見が生涯でもっとも幸福な時期であったといわれる。本多銈子は毎週2回、岡

見の助手として診療を助けにきてくれるし、その頃は松浦里子もミス・リードに代わって看護婦取締として同病院に勤務していた。三人とも熱心なクリスチャンであったため、信仰について語り合うこともあったであろう。

しかし彼女は、1893（明治25）年、この恵まれた地位を突然去っている。わずか3年であった。その理由は、創立当時から皇室との関係が深かったこの慈恵病院に、皇后の行啓があったとき、彼女が女性であるという理由で宮内省から「拝謁」を遠慮せよという通達があったためであった。そのような女性蔑視の思想は当時の常識ではあったが、医師としての自尊心が高く、長く民主主義国で生活してきた岡見には不条理であり、耐えられなかった。彼女は、その職を辞することによって不条理に抗議したのであった（もちろん高木の女医にたいする理解にたいしては心から感謝しつつ辞任した）。岡見のこのような自尊心と潔さは、幼少からうけた武家育ちの母親からうけたものだといわれる。

高木の心情としては、彼女を招聘した責任者として複雑だったと思われるが、どこか心の片隅では、自己主張のない一般女性にくらべて、はっきりした自己主張をもち、おのれに加えられた侮辱に対してははっきり抗議し、それがだめなら自ら職を辞するといった潔さに、むしろ感心していたのではないだろうか。

2. 看護婦の養成

高木が留学していたセント・トーマス病院医学校には、ナイチンゲールが創設したナイチンゲール看護婦学校があり、そこで教育された正規の看護婦が数多く活躍していた。しかし日本の病院では、患者の世話をするいわゆる派出婦的看護人はいたが、それはちゃんとした正規の教育をうけた看護婦ではなかった。彼は帰国したら是非ナイチンゲール看護婦学校のような立派な学校をつくり正規の看護婦を養成したいと考えた。

帰国後さっそく旧東京府立病院を借り受けて有志共立東京病院を開院したが、その時はまだ経済的理由のため、なかなかその看護婦学校建設まで手がまわらなかった。その頃のことを、彼は病院参観にきた華族婦人たちにこの

ように説明している。「今この病院につとめている看病婦は看病の如何なるものかを知らない無教育者ばかりですので、到底貴重な人命を保護するには適しておりません。看病婦養成の必要性を痛感しながらも多額の経費を要するために、いまだ着手できないまま三年の月日をただ空しく経過してしまいました」と。

面白いことに、このことが動機になって、華族婦人たちは看護婦教育所設立のために資金を集め、これを基本金として同教育所の設立に応援することになったのであった。

高木はこうして、1884（明治17）年、有志共立東京病院に看護婦教育所を設立した。そして初代取締教師として米国人宣教看護婦・ミス・リードを招き、わが国初めての看護婦教育を開始した。ミス・リードは米国でナイチンゲール式の看護婦教育をうけたのち来日していたのであった。彼女は看護の知識・技術を教えるのみならず、キリスト教について教えることも許された。

こうしてナイチンゲール看護婦学校を手本にしてつくられたため、看護婦教育所の教育内容は当然酷似していた。そのことについては今まで坪井良子らによって優れた著書（慈恵看護教育百年史）や多くの論文になっているので省略し、ここにはナイチンゲールと高木兼寛が共通して懐いていた看護婦像について述べることにする。

その一つは、期待する看護婦像からくるその選考法である。ナイチンゲール看護婦学校の規定をみると、上層階級の聡明な教養ある女性（25-35歳）の中から選抜している。しかも合格者の中でより上流の者（特別予科生）には3年間教育して、後に指導的立場に立てるように訓練し、比較的中流にちかい者（普通予科生）には4年間教育して、看護婦としてひとり立ちできるように訓練している。このようにナイチンゲールはなるべく良家の子女、しかもある程度年長の落ち着いた女性を求めていたのである。幼少からの家庭教育でかなり出来上がった教養、品格をそなえた母性的な女性を求めたのであろう。それにしても選抜年齢が25-35歳と高いのがちょっと気になるが、これも当時のビクトリア朝時代には晩婚化の傾向があり、平均結婚年齢が

30歳前後であったといわれるから、それほど不思議でないのかも知れない。

高木も非常によく似た選抜方法をとっている。すでに良家で相当の家庭教育をうけ、教養、品格をそなえた女性をもとめているのである。当時の入学志願者の多くが士族であり、すでに詩を作り、歌をよむ人が多かったというから、そのことは明らかであろう。また選抜年齢もナイチンゲールの学校よりは低いものの、新入生の年齢をみると21-26歳、平均23.2歳であり、当時の結婚適齢期から考えればわりに年齢の高いほうである。やはり落ち着いた、教養、品格をそなえた女性を採用したかったのではないだろうか。

実際の試験方法については面接がもっとも重視され、その際の態度がきびしく評価された。実際の面接は高木院長の前に全員を整列させて、一人ずつ呼ばれで面接が始まるのであったが、ある時どうした訳か大声で笑った受験生がいたところ、この人には看護婦になる資質がないといって即座に除外されたという。調子にのらない、落ち着いた、分別ある女性をもとめていたことが分かる。

そのことは「看護婦教育所規則」のなかに掲げられた主要教育目標・謙遜、辞讓、温和にも一致することである。高木のもとめた看護婦像が“ひかえめ”で“おだやか”な教養ある女性であったことは明らかであろう。

ナイチンゲールの教育の要諦が「看護教育は講義や書物ではなく、病人のベッドサイドにおいてのみ行われる」という点にあったことはよく知られている。そして患者にたいする心がけの言葉も数多く残っているが、要約すれば「真の看護とは、こちらの都合ではなく、患者の回復に都合のよい状態を整えること」であり、「患者が苦勞して語らなくてよいように、彼らの表情のなかにあらゆる心の変化を読み取ることである」ということになろう。落ち着いた静かな雰囲気をつくりながら、患者の要求をすべて了解していることである。

高木はこのナイチンゲールの患者中心の精神を、そのまま彼の看護婦教育所の教育理念にした。そしてその成果は間もなく、次のような歴史的事件によって証明された。1889（明治22）年10月、時の外務大臣・大隈重信が爆弾を投げつけられ右足を失ったとき、看護婦教育所生徒であった四名（橋村

延世、松井トラ、高部マツ、平野チサ）が大隈邸に派遣され、大隈が回復するまでそこで看護にあたったのである。そのときの看護ぶりがよほど立派であったらしく、大隈夫人から院長あてに丁重な感謝状が届けられた。それには「医家の旨をうけて着々機を誤らず、病者の意を迎えて声なきに聞き、形無きに見、一動一作、誠実専一に看護せしことは、数十日の久しきあいだ、日夜傍らに在りて実見するところなり……」と書かれてあった。当時の生徒がいかにか落ちついて、患者の心の変化に敏感に応じていたかを示す内容であった。

こうして高木が創始した看護婦教育は大きく成功したと思われるが、この成功の影には教育所取締・ミス・リードおよび松浦里子らの協力があったことも忘れてはならない。この教育所が日本で初めての正規看護婦を世に出したときの喜びを大関 和（明治期看護婦界の大御所）は後年このように述べている。「されば院長高木師の精神とリード師の固き信仰と松浦氏の慈愛とによって養成せられし第一期卒業生は鈴木さく子、大石てる子、近藤かつ子、板谷こと子、吉岡よう子の諸姉にして、明治21年2月を以って卒業授与の盛典を挙行せられ、神と人の前に於いて我国看護婦の栄冠を受けられぬ。これ我国看護婦の率先者にして妾等の為模範となられし人々なりし」と。

III. 健康な子供を育成するための女子教育

明治初期、欧米列強に対して開国した日本は、武力と経済力を背景にした新しい国際秩序のなかで、いかにして日本の独立を確保するかが最大の問題であった。

長い留学生活を終えて帰国した高木には、日本の貧しさが気になることであつた。彼には、この貧しさの最大の原因は、先ず日本人の体力の無さにあるように思われた。栄養のないものを食べ、貧弱な体格をして、いつも病気になり、若くして死んでいく同胞のことであつた。日本ではじめて調査された明治20年代の平均寿命は男42.7歳、女44.3歳であり、驚くほど短いものであつた（この短い寿命には乳幼児の死亡率の高さも大きく影響していた）。

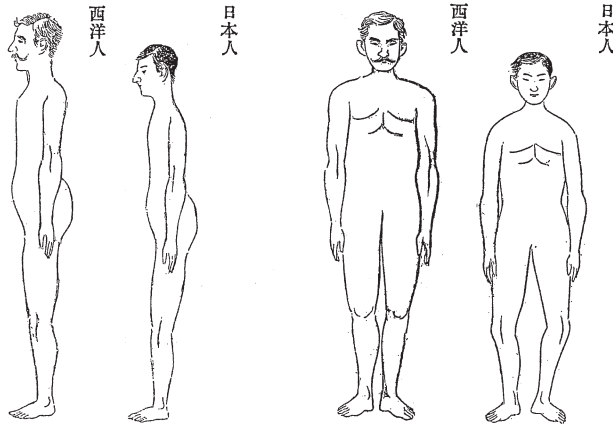


図1. 日本人と西洋人の体格の比較³⁾

また同じ頃の成人体格は、身長男 157 cm, 女 145 cm, 体重男 50 kg, 女 45 kg であった。今からみると驚くほど小柄である。

高木を悩ませたもう一つのことは、これと関係するが、日本人の体つきの醜さであった。彼はこのことを自嘲的に「日本人は、脚は短く、かつ曲がっているから、まるで浅草の猩々（オランウータンのこと—筆者）のようだ」と述べている。高木が講演でつけた挿絵を図1に示す（明治33年、「日本婦人」より引用）。

このような日本人の欠点を改善するためには、時間がかかることではあるが、当然それは子供を産み、育てる女性（母親）に依頼するしか方法がなかった。高木が足しげく女子学生や婦人を対象に講演に出向いたのはそのためであった。

1. 体育——健康な身体をつくるための教育——

彼はそのことについて、実際にこのように話している（明治20年、「女学雑誌」より）。

「今日の日本はどういう有様でしょうか。わたしの考えでは死ぬような重

症患者であると思います。是が非でも医者が必要です。医者役目は誰がするのでしょうか。ご婦人にきまっています。どうか日本が死なぬようにお助け下されとお願いしたいのです。

国が死にかかったのは貧乏のためであり、それは欧米人に比べて日本人の身体が小さく、弱く、短命であるからであります。身体を大きく強くするのが、貧乏すなわち死にかかった国を救う道であります。

日本人の身体がこのようになってしまった主な原因は衣食住であります。衣服も飲食も住居もすべて婦人の手にあります。今この三つを十分にしていなかったために、日本人がこんなに小さくて弱くなってしまったのです。

それ故、この三つを正しくすれば、身体は丈夫になり、したがって精神もたしかなになり、よく労働にも耐えられ、収入も増え、国も富み、強くなります。私は婦人が一致なさればこの国を生かすことが十分にお出来なさるだろうとおもいます。……

とにかく兵卒になれないような男は役にたちません。今日、お出でのお方はけっしてソナナ男をご亭主になさってはなりません。そんな男はご亭主になさると生涯のご難儀でございませぬ。あとあと出来る子供はだんだん弱く小さくなって役にたちません。女は鉄砲をかつげる立派な男児を産まなければなりません。……

欧米人は日本人にくらべて体格は偉大で強壯、加うるに長寿であります。この欧米人に対して、体格の矮小にして薄弱、短寿な日本人が将来生存競争しなければならぬとしますと、その結果は体格矮小薄弱短命なものが敗けるに決まっています。私はこれを憂うるのであります」と。

1) 食物

まず食物の問題であるが、これは高木がもっとも力を入れて話したテーマであった。講演のたびに、まず生き物にとって食物がいかに重大であるかという理由からはじめている。

そもそも我々の身体は精巧な時計のようなものである。多くの物質から精密に組み立てられており、身体の働きはすべてこれら物質の働きによるのである。この奇妙な構造物をながく働かせるためには、次々消耗するこれら構

造物を食べ物によって補充，維持しなければならない。

粗悪な食べ物ばかり摂っていれば，補充，維持ができず，正常な働きができなくなり，発育が悪くなるばかりでなく，病気になるのである（高木が注目した脚気病などはその典型である）。

食物といえば，云うまでもなく野菜，穀類，肉類などであるが，これらは共通して栄養成分である蛋白質，澱粉質，塩類，水の四つから成り立っている。米を分析しても，肉を分析しても帰するところは，この四つの成分に他ならない（現在の栄養学では栄養成分は蛋白質，炭水化物 = 澱粉質，脂肪，ビタミン，塩類，水の六つになるが，ビタミンは当時まだ発見されていないし，脂肪は蛋白質・澱粉質に比べて量的に少ないので外したのであろう）。

大切なのは，この四つの栄養成分をどのような割合で摂るかということである。高木は，蛋白質 1，澱粉質 4，合わせて 5 のものを，体重の百分の一食べれば理想的だという。例えば 15 貫目の人は蛋白質 30 匁，澱粉質 120 匁（合わせて 150 匁）を毎日食べれば，無病壮健，すなわち 365 日毎日働いても体重は減らず病気になることも無いというのである。それに反して蛋白質が少なく澱粉質が多くなって，割合が 1 対 8 ～になると脚気をはじめいろいろの病気が起きてくるのである。

その実際例を，彼はよく海軍の囚人についての調査結果で説明している（表 1，明治 22 年，「女学雑誌」より引用）。1883（明治 16）年の囚人食の蛋白質対澱粉質 1 対 10.8 では多くの患者を出していたのに，明治 17 年，18 年の 1 対 8.2，1 対 6.0 に改善したところ，一般患者は減少し（とくに明治 18 年），脚気病にいたっては完全にいなくなってしまったのである。とくに脚気病の変化が著しいことから，高木は脚気の栄養欠陥説を提出した。そしてこれが後にビタミン学説に発展したことはよく知られている。

高木は，蛋白質を増やし澱粉質を減らすために，麦や豆を用いることを大いに薦めた。講演の終わりにはいつもこのように結んでいる。「明治 18 年以来，海軍兵食を麦飯にしたために，病気というものが減ってきた。とくに脚気病が激減した。そのお陰で日清戦争にも，日露戦争にも勝つことができた。麦飯と味噌汁のお陰である。皆さんも，刺身や牛肉を食べずにすむならば，

表1. 横須賀鎮守府監獄署囚人における一般患者と脚気患者¹⁾

年次	1日に食せる蛋白質量, 澱粉質量			囚人の一般患者表			囚人の脚気患者表		
	蛋白質	澱粉質	蛋白質/ 澱粉質	囚人 延人数	患者 延人数	患者 百分比例	1日平均 囚人数	脚気 患者数	患者 百分比例
明治16年	匁 22.4	匁 242.4	1/10.8	人 41,358	人 10,789	26.09	人 113	人 69	61.06
明治17年	26.8	219.8	1/ 8.2	46,720	11,243	24.06	128	73	57.03
明治18年	29.6	177.6	1/ 6.0	61,320	2,256	2.68	167	0	0

麦飯と味噌汁が一番良いのです」と。

2) 着物

高木が着物について講演する要旨はいつもこのようであった。衣服の必要条件は、出来る限り活動できやすいように裁縫することである（身体のあらゆる部分は活動することによって発達する。幼少から眼を使うことによって眼が物を認識できるようになるのと同じである）。また成人にあっては生活のために労働しなければならないから、衣服はまた楽に労働できるように裁縫されていないといけない。

しかるに日本の着物（和服）はこのような条件に全く添っていない。まず袖が広すぎる（広袖）。この広袖は邪魔になるばかりで、何かするときには口でくわえるか、たすきを掛けるかしなければならない。活動するには、垂れ下がるものが付いていない筒袖が良いに決まっているのである。

次に胸の部分である。和服では附紐や幅広い帯で乳房の下（第5，第6肋骨あたり）を大変きつく締める裁縫方になっている。そのため小さいころから和服を着ていれば、ちょうど胸郭に鉄の輪をはめこんだようなもので、胸の発育をつよく抑えて、腹部を前につきだすようになる。つまり体形をひどく悪くするのである。

腰から下の部分はどうか。これもまた和服は不都合に裁縫されている。脚が二本あるのに一つの筒に収めるようにできている。これではうまく歩けるはずがない、外国人の着物のように二つの筒に両脚を分けて入れれば歩くこと

はよほど楽になるのである。

高木が婦人方をまえに手振り見真似でユーモラスに説明しているところがあるので、その部分を引用する（明治20年、「女学雑誌」より）。

「着物の拵え方が悪いのです。それはまるで身体を縛ったも同様に、この所〈腰〉をしめた上に、ここがこういう風になりましょうから〈手拭で膝の下を縛る〉、歩きつきが悪くなります（大笑）。これでどうして歩きましょう〈手拭で膝の下を縛ったままにして歩いてみせる〉、それですから急ぐとこうなりましょう〈歩行の困難なる状を示す〉。これで無いようにしようとすると前がまくれてこうなるので〈再び歩行の困難なる状を示す〉（大笑）、けっきょく足に綱をつけているようなものです。それですから二つの筒の洋服で道を十丁歩くのと日本の着物（一つの筒）で五丁歩くのと疲れが同じになってしまうのです。以上が一つの筒にしておいてはいけませんと云う私の考えであります」。



写真1. 明治20年頃の看護婦生徒の服装
高木の希望どおりに作られている

たしかに彼の看護婦教育所の生徒や慈恵病院の看護婦の服装は（写真1、「慈恵看護教育百年史」より引用）、木綿の筒袖の上着と下はズボンのように仕立ててあり、幅の狭い帯を巻き、衿もとから白い前かけをかけ、その上から細いベルトをしめるかたちになっている。そして履物は病室内では足袋はだして、廊下では草履を履いていたという。

草履のことができたので、履物についても少しふれる。高木によると草履は足から離れやすいから戸外の履物には適当でないという。靴も悪くはないが、足がむれるし重いから疲れやすい。その点、草鞋（わらじ）は足にぴっ

たり合い、しかも軽いから、世界最上の履物である。しかし、そうは言っても、文明開化の今となってはズボンに草鞋を履くわけにもいかず、やはり靴であろうと言う。

3) 住居

日本の住居の構造は、日本人の下半身（下肢）の発育をひどく悪くするというのが高木の主張であった。発育の悪いのは人種の違いではなく、畳の上に座るという風習のためであるというのである。

たしかに欧米の婦人方と一緒に座るときは、身の高さにさして違いがないのに、立ってみると大そう違っている。これは胴の丈はそれほど変わらないのに、脚がひどく短いからである。

これは膝を屈して座るために、血液循環の障害がおり、下肢の発育が大いに妨げられたためである。そもそも血液循環は身体各部分に栄養分を送るためであり、各組織はその栄養分を修繕、増築のために使うのである。生まれて22-3歳ころまでに、それが十分にできないと、その組織は栄養不足をきたし、十分に発育することができないのである。

欧米人が彼らの住居で（椅子に）座るときは、股も膝も直角以上には屈しないため、血液の循環はさして障害されないが、日本人の（畳の上の）座り方では、直角どころか、はなはだしい鋭角になるため著しい障害がおこるのである。いったいに、血管というものは円い管であるが、股、膝部で圧迫すれば扁平になり、閉塞し、循環を著しく障害するのである（感覚的にはシビレ、疼痛）。

こういう循環障害を、生まれて20年以上も毎日毎日継続した結果、栄養不足のため下肢が十分発育できず、また骨の発育まで悪くしてガニマタになってしまったというのである（図1）。

しかし明治の教育をうけた少年、少女たちは、学校で椅子の生活をしているために随分背丈が高くなった。これは高木が期待した通り下肢が十分伸びたためであり、日本の教育の方針が定まって、学校に畳を廃して椅子に腰掛けるようにしたためであった。

欧米の椅子やテーブルの生活は金がかかるように考える人がいるが、高木

によると、畳もしばしば表替えをしなければならず、経済的にはそんなに違うものではないという。

舟こぎ体操を考案 高木最晩年の講演の様子が当時の府立第一高女生徒の手記に残っている。「かっぶくのよい高木先生は威風堂々として、先導の校長先生よりずっとお立派でした。『男は帽子をかぶるから頭の毛がなくなってしまうんだ』とご自分のはげ頭をたたいて皆を笑わせたりなさいました。『女の人は帯を胸高に締めるから衛生上よくない、右手を肘からまげて腹にあて、そこから下へ帯を締めなさい』と、女の人がその位置に赤い帯を締めている大きな絵図面を先生ご自身でおもちになってお話しなさいました。いまでも帯を締めるとき、いつもそのときの絵図面を思い浮かべます。そしてその日の最後に、先生ご考案の舟こぎ体操を、先生とご一緒に生徒全員が声を張り上げて、「海行かば」を歌いながら行いました。ご満足げに巨体をゆすってご退場なる先生の後ろ姿を、今でもよくおぼえております」。

文中の高木考案の「舟こぎ体換」は、そのご松元稻穂（国民体操研究所所長、慈恵医学校体操教員）によって改良され、それが今日のラジオ体操に発展したといわれる。

この小論では、その後の日本人体格の変化を追跡していないが、現在の日本人の体格を見れば、高木の心慮はいちおう解消されたと考えてよいであろう。これは高木ら衛生学者の功績とってよいものである。

2. 徳育——人間の品性を高めるための教育——

ここにいう品性とは、人柄のことであり、かたく言えば倫理的にみた性格のことである。高木が、この人柄、品性を重視したことは、先述の看護婦教育所の入試や、慈恵医学校の入試に品性試験なるものを設けたことから明らかである。

高木のいう品性の内容については、品性試験に合格した新生入生にたいする次のような説明からも理解できる。「新生入生の諸君の精神は、いかなる城（倫

理観のこと一筆者)に立てこもっているか、この城が破られんとするとき、諸君はわが生命を捧げてもこの城を守ろうとする精神があるかどうか、そのような根拠地(宗教のこと一筆者)があるかどうかをお尋ねしたのである」と。そしてこの品性試験での実際の質問は「君は信仰をもっているか」とか、「どういう宗教に関心があるか」などであったというが、そのさい宗教にまったく関心を示さないような受験生は遠慮なく落としたという。彼が品性試験を設けた理由は、しっかりした倫理観をもっているかどうか、その土台になる宗教観をもっているかどうかを知ろうとしたからであろう。彼はかねがね宗教に根をもたない倫理、道徳はすぐに枯れてしまうと説いていた。

彼は、自分の倫理宗教観の芽生えをしばしば幼少時の体験から説明している。ここには実践女学校の卒業式で話したものを少し長いがそのまま引用する(明治43年、「日本婦人」より)。彼の倫理観の核になるものである。

「私の家はきわめて貧しく、間口四間に奥行き二間というみすぼらしい家に住んでいました。それでも父母のお陰で私は勉強するために塾に通ってました。貧しいとはいっても武士の流れをくむものですから、父は私を一人前の武士に仕立てようと考えていました。しかし父も学問がありませんので、父からうけた唯一の教訓は「正直にせよ」「男らしくせよ」「正直でなければ武士にはなれぬ」ということだけでした。

私の一生を通じて忘れられない一事件は、春の彼岸の頃でありました。私は毎日塾に通っておりました。ところが塾に行く途中、友達のところに寄りますと、彼岸の団子をつくったから食べて行けとのこと。子供のことですから団子を食べて遊んでいると、もう塾に行く時間が過ぎてしまいました。塾の先生は昔気質の厳格一点張りの人で、子供心に大変畏れておりました。今から行けば叱られるに決まっている、それが恐さにとうとうその日は行かないで家に帰ってしまいました。父が先生のことをいろいろ尋ねますが、いい加減なことを言って何とかごまかしました。

翌朝は先生のところに出かけたのですが、昨日欠席したのと、父にいい加減なことを言ったのが気になって、どうも行く気がなくなりました。そこが子供心で、今日も休んでしまえと考えまして、また友達のところへ行って

遊んでおりました。

そのところに父がヌツとあらわれました。私は思わずひやりとしました。父はいきなり私を引き立てて家に帰り、座敷に連れ込み、自分の前に座らせました。わたしは父の顔をまともに見ることができません。

『お前は昨日先生のところに行ったか』言葉はきわめて厳格でした。『昨日、お前は立派に先生のところに行ったと言った。しかし今日、先生に逢って聞くと、お前は昨日も、今日も行かなかったそうだ。行かないのもいいだろう。しかし行かないものを、何故行ったと偽ったか。父はかねがね何と教えたか。正直でなければ立派な武士にはなれぬと毎日言い聞かせたではないか。お前のようなものは、腐り果てた人間になって、先祖の名も、家の名誉も恥づかしめるものだ。お前のようなものは生かしておくことはできない、成敗してくれる』というより早く、父はそばにあった巻き割りで私の臀部をつづけ打つのであります。

何といっても罪は私にあるのですから、私は痛さに堪えて黙っておりました。父はますます激しく打ちます。そこへ母が驚いて走ってきまして、とにかくその場は助かりました。そしてそれから二週間ばかりは、母は毎日、紫色になった傷あとを見ては『何故お前は偽りをいったか。これはお前の罪の跡だ。そんな浅ましい心では立派な人間にはなれぬ。人が見ていないからと悪事をして、お天とう様はちゃんと見ておいでになる。終始、表も裏もないように努めねばならぬ』と泣いてくれたのであります。

私は、父の恐さは一度で身に染みましたが、同時に母の温かい涙に如何ばかり感化されたことでしょう。以来、私はけっして嘘はつくまい、どうかして母の慈愛に報いたいという気になりました。（高木の母にたいする思慕の情はきわめて厚く、彼の雅号・穆園の園は母の名前からきたのであり、穆は故郷の地名に因むものである）。

高木は、長い生涯にわたって、いろいろな宗教に接近したことはあったが、つねづね心の底にあった神仏観はこの「お天とう様」であったと思われる。また彼は、息子や孫たちに幼少のころから、まるでお経を読むように「嘘をつくな」「人をだますな」「神を敬え」と繰り返したというが、そのもとはと

いえば、この父母の「教え」からきているように思われる。

そういえば福沢諭吉にも、自分の子供たちにあたえた同じような教訓がある。福沢は毎日守るべき徳目の第一として「うそをつくべからず」を挙げ、それに続いて「てんとうさまをおそれ、これをうやまい、そのころにしたがうべし」をあたえたという。

高木の母や福沢がいう「お天とう様」は、日本人が元来もっていた神仏観であり、それはもちろん実在する太陽のことではなく、われわれの周りにいつも存在する“自然神”に近いものだったのではないだろうか。

高木が宗教について講演することは実に多かったが、他の演者のように情緒的であったり、理念的であったりすることはなく、多くはまことに実際の、現実的であった。高木にとっては「信仰心」と「精神修養」とはほぼ同義であった。信仰心の効用を次のように説明している。

「子供を立派に育てるには、幼少のときから確固不動の信仰をいさぐように養成することが必要です。すなわち人間以外のある偉大な力をみとめ、常にその力に頼るように習慣をつけるのです。そうすれば精神上不動の観念があらわれてきます。不動の念がある人は、あらゆる人事、世事にかんして失敗することが少ないものです。どんな場合でも、多くは自分の意思を貫徹することができるから、自然に長寿を保つようになります。……

私は自分の経験上から、まじめに神信心をすれば、飲食やその他の欲望を抑えることができ、過不足のない生活をする事ができると信じています。……

私は自分で医学校をもっていて、学生を養成していますが、その学生を善い方に導くために、自ら精神を修養して、それを学生に及ぼそうとしております。そのために宗教的なことに専念していますが、この頃になってようやく一条の光明を見出したような心地がしています。……」(1915(大正4)年、「婦人世界」)という具合である。

その頃、高木は「禊の行」という宗教にはいり、ある宗教的悟りの境地に到達していた。いまの“一条の光明を見出した”というのは、このことを言ったものと思われる。禊の行というのは、絶対にちかい粗食をとりながら、冷

水に身体を浸しながら、激しい運動を繰り返す行であって、行をすすめるにつれて心身の統一が可能となり、神我一体の悟りの境地に到達できるという神道の一つである。高木はこの行に自らを投げ入れることによって心身の統一、神我一体の悟りの境地に到達できたのであった。

神社での結婚式は高木兼寛の発案 元来日本での結婚式は自分の家の屋内で行うのが普通であったが、英国のキリスト教会で行われる式を見た高木は、日本でも神社で式を行うことを思いついた。つまり日本の神様のまゝで結婚することを宣誓する形式である。

興味深いのは、自分の長男（高木喜寛、本学第二代学長）の結婚式、長女の結婚式を第三号、第四号として神前（日比谷大神宮）で行っていることである。彼は式次第についてもくわしく考案しているが、その長女のときの誓詞がのこっているの、その一部をここに掲載する（1904（明治37）年、「日本婦人」より）。

「明治三十六年十一月三日、樋口伊三次次男・樋口繁次、高木兼寛長女・寛子と此の神の大御前に婚儀を行うに当たり、媒酌人〇〇〇〇〇〇畏みて此の人々に代わりて曰さく、茲に夫婦の契りを結び堅むる事は専ら尊き神の御心に依れることを悦び祝いて今より後は互いに睦み敬い親しみて唱従の道内外の位を誤らず、内政を整理へ家業を励みいそしみ勉めん事を誓い奉るなり」。 (ちなみに誓詞中の繁次、寛子は第6代学長・樋口一成の実父母である)。

IV. 女子教育にたいする期待と危惧 —— 少子化問題を提起 ——

高木は晩年になって、女子の教育が進むにしたがって、その出産、育児の面に欠陥があらわれてきたことに気がついた。困ったことであった。

1917（大正6）年、高木は総理大臣・寺内正毅の諮問会議・臨時教育会議において、次のような報告を行っている。「教育程度の高い女性ほど子供を産もうとしない者が増え、母乳を与えようとする者が増え、そのため子供

の出生率が下がり、死亡率が高くなった」というのである。それはいかにも高木が女子の（高等）教育に反対するかのような印象を与えたらしく、人によっては、「高木は女子教育亡国論者」であると烙印を押したほどであった。高木がこの会議で一体なにを言おうとしたのかここに考察してみたい。

彼の実際の報告はこのようであった。「先年調査しましたところによりますと、より高等の教育を受けた女性の出産する子供の数は少なくなり、子供を出産しない女性が増えているのであります。

実例を示しますと、高等師範学校卒業生の出産経験者の人数に対する未経験者数の比率は、府県の師範学校卒業生についての同比率より大きいのであります。また府県の師範学校卒業生の出産経験者数に対する未経験者数の比率は、高等小学校卒業生の同比率より大きいのであります。つまり、高等教育を受けた女性ほど出産しなくなり、従って子供の数は確実に少なくなるのであります。

また母乳の出方も違うのであります。より高等の教育を受けた者の子供は母乳を飲む機会がはなはだ少なくなり、そのことによる子供の死亡率は高くなるのであります」と。

同じ頃、高木はまた彼の著書のなかで、日本における出生率と西欧先進諸国の出生率を比較している（表2、大正6年、高木兼寛著「心身修養」より）。この表を見ると、日本の出生率は、まだ小学校卒業者が圧倒的に多いためか、良い値を示しているのに、先進国たるフランス、ドイツ、英国では年々減少している。すなわち日本が近代化の手本にしてきた西欧諸国の出生率が毎年

表2. 日本と西欧諸国の出生率の比較³⁵⁾

	明治 19 年	明治 25 年	明治 31 年	明治 37 年	明治 43 年
日 本	28.5	28.6	31.1	31.7	32.7
フランス	36.5	36.3	36.0	34.3	31.6
ドイツ	23.1	23.3	21.9	21.2	19.9
英 国	31.4	30.5	29.3	28.1	26.1

減少し、やがて人口も減少することを示しているのである。彼はこれを見て、日本がこのまま西欧化・近代化を目指して女子の教育、社会進出をすすめていっては危険ではないか、少し振り返ってみようと思ったのではないだろうか。先ほどの教育会議での発言はこのことの危惧から来ているように思われる。

そういえば、この1917（大正6）年頃の講演とそれ以前の講演とのあいだには、確かに何かトーンの違いが感じられるのである。例えば10年前の1906（明治39）年ごろには、まだ威勢よく「わが輩は婦人の教育も男子と同等に高等教育を授けて、世界的知識、教養の啓発につとめることが必要であると考えるのである」（「愛国婦人」）と断じているのに、1916（大正5）年になると「私は、特別の場合は別として、婦人が男子と同じように職業をもって生活費を得るとするのは誤りではないかと思えます。……婦人はやはり家にいて家を治めることを本位としたいものです。……そのためにはとくに読み書き算数に熟練させることが必要であると思えます」（大正6年、「婦人世界」）と、かなりトーンが下がってしまうのである。

筆者の考えでは、高木はこの時点で、日本の将来の出生率の減少と、それに続く人口の減少を予見し、危惧したのではないかと思うのである。つまり今日的表現の「少子化」の問題に気がついたのである。

この少子化の問題は、ここ140年も続く社会的、経済的出来事の結果であり、歴史的、文化的問題でもある。この問題は明治維新以来すすめてきた西欧化・近代化（つまり資本主義化）の必然的結果なのである。高木が掲げるような「女性が家庭にもどり、育児や家事に専念する」といった部分的修復によって解決できるような単純な問題ではないのである。これには社会的活動をしながら子供を産み育てられる新しい社会構造が必要なのである。

しかし、それにもかかわらず、筆者が高木の提言を高く評価したいのは、100年も前にすでに今日の「少子化問題」に気づき、それを危惧し、注意を政府に喚起していることである。

現在、日本の少子化と人口減少は予測以上の速度で進行している。かつて1990（平成2）年ころまではドイツやイタリアよりはまだましであった出生

率も、少子化対策が進まないうちに、いつのまにか逆転され、2003（平成15）年にはついに先進国中最低（つまり世界最低）になってしまった（「平成17年版 少子化社会白書」内閣府）。

文 献

- 1) 高木兼寛. 女子と衛生. 女学雑誌 1887; 66: 105-9, 67: 127-8, 68: 148-50, 70: 187-90, 71: 5-9, 72: 25-8, 73: 43-5.
- 2) 高木兼寛. 飲食物に就いての注意. 女学世界 1901; 1-9: 6-7.
- 3) 高木兼寛. 体育の事に就きて. 日本婦人 1900; 14: 32-9, 1901; 15: 47-52, 16: 27-32, 17: 32-8, 19: 28-36, 22: 49-58.
- 4) 高木兼寛. 女子服装改良意見. 婦女新聞 1901; 40: 2.
- 5) 高木兼寛. 室内衛生. おんな 1902; 2-5: 14-25.
- 6) 高木兼寛. 家庭の信仰心. 日本婦人 1904; 52: 25-9.
- 7) 高木兼寛. 結婚儀式の改良. 日本婦人 1904; 53: 18-20.
- 8) 高木兼寛. マッギー女史. 婦女新聞 1904; 210: 4.
- 9) 高木兼寛. 衣食住の改良. 女学世界 1905; 5-5: 56-63.
- 10) 高木兼寛. 旅順病院視察談. 婦人新報 1905; 93-3: 33-4.
- 11) 高木兼寛. 家庭の規律. 女鑑 1906; 16-6: 16-8.
- 12) 高木兼寛. 食物に就いて. 女鑑 1906; 16-7: 48-52.
- 13) 高木兼寛. 住居に就いて. 女鑑 1906; 16-9: 46-52.
- 14) 高木兼寛. 衣食に就いて. 女鑑 1907; 17-4: 17-23, 17-5: 17-23.
- 15) 高木兼寛. 欧米婦人と日本婦人. 愛国婦人 1906; 109: 2.
- 16) 高木兼寛. 健康長寿法. 女学世界 1907; 7-3: 33-7.
- 17) 高木兼寛. 麦飯の効用. 女学世界 1907; 7-7: 53-6.
- 18) 高木兼寛. 人心の警鐘. ムラサキ 1907; 3-6: 7-10.
- 19) 高木兼寛. 果実の詩趣と栄養. ムラサキ 1907; 4-2: 48-50.
- 20) 高木兼寛. 思い出すよじゃ. 婦人クラブ 1907; 4-9: 95.
- 21) 高木兼寛. 予が宗教観. 法の母 1908; 186: 24-6, 1907; 187: 15-7, 188: 14-6, 189: 10-5.
- 22) 高木兼寛. 外国人は日本人より何を掘り出さんとするか. 愛国婦人 1908; 159: 3, 160: 3, 161: 3, 162: 2, 163: 2, 165: 3.
- 23) 高木兼寛. 夫婦年齢の差はどのくらいまでは害にならないか. 東洋婦人画報 1908; 19: 3-4.
- 24) 高木兼寛. 肉体と精神とを清潔に保存する法. 愛国婦人 1909; 173: 3.
- 25) 高木兼寛. 方式より受くる教訓. 婦人新報 1909; 142-5: 5-8.
- 26) 高木兼寛. ころころしない心. 婦女新聞 1909; 467: 3.
- 27) 高木兼寛. 母の涙によって救われたる我が幼児の生立. 日本婦人 1910; 12-4: 29-33.

- 28) 高木兼寛. 内外国債三十億（上）（下）. 婦人新聞 1913；669：6, 670：6.
- 29) 高木兼寛. 健康の保存法. 女学世界 1915；15-1：8-13.
- 30) 高木兼寛. どうすれば長生きができるか. 婦人世界 1915；10-12：57-60.
- 31) 高木兼寛. 三人の子供を洋行させた経験. 婦人世界 1916；11-13：7-11.
- 32) 高木兼寛. 家庭教育の根本方針. 婦人世界 1917；12-4：2-5.
- 33) 日本女医会編. 日本女医史. 大阪：日本女医会；1991.
- 34) 百年史編集委員会編. 慈恵看護教育百年史. 東京：東京慈恵会；1984.
- 35) 高木兼寛. 心身修養. 東京：広文堂；1916.